

学位請求論文審査報告要旨

2017年2月8日

学位請求者 吉岡 佳子

論文題目 ろう理容師たちのライフストーリー

論文審査委員 糟谷 啓介
イ ヨンスク
森 壮也

1. 本論文の構成

本論文は、ろう学校理容科を卒業して理容師として活動するひとびとからの聞き書きに基づき、ろう者の生活史を質的調査の方法によって記述するとともに、ろう理容師でつくる団体である全国ろうあ理容連盟の活動をろう者の社会活動のモデルケースとして考察することを目的とする。また、合わせて、ろう学校における口話教育の功罪についても論究される。本論文の構成は以下のとおりである。

第1章 はじめに——研究目的ならびに期待される成果

第2章 研究背景——基本的な概念と先行研究

2.1 ろう理容師の定義

2.2 手話

2.3 「障害者」、「ろう者」はどのように捉えられてきたか

2.4 ろう教育・ろう学校

2.5 ろう学校理容科の設置とその推移

第3章 研究方法と調査対象

3.1 質的研究法

3.2 エスノグラフィー

3.3 ライフストーリー・インタビュー

3.4 店舗観察

3.5 その他の調査

3.6 研究倫理

第4章 ろう学校での体験

4.1 ライフストーリー・インタビュー

4.2 宮城県立聴覚支援学校見学

4.3 まとめと考察

第5章 就労ならびに店舗におけるコミュニケーション実践

5.1 ライフストーリー・インタビュー

5.2 三店舗における観察

5.3 アンケート調査

5.4 まとめと考察

第6章 全国ろうあ理容連盟（全ろ理連）

6.1 概説

6.2 全国ろうあ理容連盟結成までの流れ

6.3 全国ろうあ理容連盟結成

6.4 関連団体

6.5 全国ろうあ理容連盟の活動経過

6.6 まとめと考察

第7章 おわりに――ろう理容師たちの残したもの

7.1 ろう理容師を対象とする質的調査から判明した点――視点①からのまとめ

7.2 ろう学校理容科と口話教育――視点②からのまとめ

7.3 全国ろうあ理容連盟の位置づけ――視点③からのまとめ

7.4 多文化共生社会の中で

7.5 今後の課題

謝辞

参考文献等

添付資料：アンケート用紙

2. 本論文の概要

第1章では、本論文が目指す研究目的が述べられる。研究目的は以下の三点である。第一は、ろう者のなかで理容師という特定の職業に従事するひとびとを対象にして、質的調査の方法を用いて記述をおこなうこと、第二は、ろう学校理容科設立の目的とされた口話教育の成果および限界について、当事者による就業現場の観察に基づいて考察すること、第三は、ろう理容師たちが結成した全ろうあ理容連盟の活動をたどることで、言語的少数者としてのろう者の活動のモデルケースを提示すること、である。また、これまでアカデミックな研究の対象となっていなかった、仕事場でのろう理容師と聴者の顧客との実際のコミュニケーションを明らかにすることに本論文の独創性があることが述べられる。

第2章では、本論文の前提となる基本的な概念と先行研究が論じられる。「日本手話」と「日本語対应手話」との区別、「障害者」ないし「ろう者」に関する「医学モデル」「社会モデル」「文化言語モデル」の視点の差異、「ろうコミュニティ」を把握する際の「集団モデル」ないし「集団社会モデル」の意義、手話と口話の対立からみたらう教育の歴史、ろう学校理容科設置の経緯とその後の推移などの論点が整理され、本論文の輪郭が描かれる。

第3章では、本論文が採用する研究方法と調査対象が論じられる。まず、量的調査と質的調査の区別がまとめられ、質的研究においては、データとコンテクストとの関係や調査者と対象者との相互作用が重視されることが強調される。質的研究のなかで、本論文が採

用するのはエスノグラフィーである。エスノグラフィーはもともと人類学で用いられてきた手法であるが、現在では、他の人文社会科学の分野でも用いられている。その特色は、研究対象とする現象を内側から理解することにある。本章では、実施した調査の期間、インタビューの人数、場所、調査協力者のプロフィールが述べられる。さらに、章の最後では、手話によるインタビューを文字化するときの問題点、ライフストーリー・インタビューにおける調査者のポジショニング、研究倫理などの問題が論じられる。

第4章では、まず3名の調査協力者とのインタビューから、各人のろう学校に入学した経緯やそこでの体験、口話教育への思い、理容科に進学した動機や国家試験受験の際の苦労などを語った部分を取り出される。この3名は聴力を失った経緯もろう学校の入学時期もまったく異なる。こうしたインタビューのなかから、ろう学校においてろう者が理容師を目指すようになる経緯や背景が浮かび上がってくる。章の後半では、著者が宮城県立聴覚支援学校理容科を訪問して、実習授業の様子、店舗での実習、生徒の志望動機などについての観察調査した結果が述べられる。この章の考察を通して、口話至上主義であった当時のろう学校においても、理容科の教師たちは通訳が可能なレベルの手話を習得していたことが指摘される。

第5章では、ろう理容師へのインタビュー、アンケート調査、著者による観察を通して、ろう理容師の就労体験と店舗でのコミュニケーション実践が論じられる。前者については、被調査者が理容師を志望して店を開くまでに至る経緯とろう者ならではの苦労が、インタビューを通じて明らかにされる。後者については、来店する客のほとんど大多数は聴者であるため、店舗では必然的にろう者と聴者がコミュニケーションを取ることが要請されるが、それでは、そのときどのような手段が使われているか、という問題が提示される。調査によると、ろう理容師たちの店での接客には、筆談、写真やイラスト、口話、身ぶり、手話などのさまざまな手段を通じて、店主と客とのコミュニケーションが取られている。口話についていえば、髪長さやスタイルを確認するための短い発話が多く、補助的な手段にとどまっている。その結果、ろう理容師たちが意思疎通に努めているだけでなく、客の側もさまざまな手段を用いてろう者に歩み寄り、コミュニケーションを図っていることが明らかになった。この理論的含意は結論で詳しく論じられる。

第6章では、全国ろうあ理容連盟（全ろ理連）が設立され今日にまで至る経緯が述べられ、その活動を通して「デフフード（ろうであること）」が明確化されるプロセスが論じられる。1933年に徳島県立聾啞学校に全国最初の理容科が設置されて以降、各地のろう学校に理容科が設立されるが、戦前にはろう理容師たちが独自の組織を立ち上げたことはない。戦後になって、各地のろう学校理容師の卒業生たちが、ろう学校の同窓生を中心として、ろう理容師の団体を次々に結成した。昭和30年代になると、各地の組織の連携の動きがみられ、昭和40年ごろには全国組織の必要性が説かれるようになる。何人かの中心メンバーの献身的な努力を通じて、1969年10月に東京で全国ろうあ理容連盟設立大会が開催される。著者は、全ろ理連が開催する全国ろう理容師大会に注目し、そこで掲げられた運動方針や活動報告などから、全ろ理連盟の目指す理念を取り出そうとする。著者の見るところ、外部からは、ろう理容師は「耳の聞こえない障害」を克服して社会で立派に活動する者と

して描かれるが、全ろ理連の捉え方はまったく異なる。それによれば、ろう理容師たちが社会参加のために必要としているのは情報保障であり、それを達成する責任を負うのはろう者の側ではなくその外側の社会のほうである。著者はこうした点に注目して、全ろ理連は理論的に社会モデルと文化言語モデルが出現する以前から、そうしたモデルとしての活動を実践してきた稀有の団体であると特徴づける。

第7章では、これまでの章の結論を整理したうえで、第1章で提示された三つの視点（ろう理容師に対する質的調査、口話教育の成果と限界についての検討、全国ろうあ理容連盟の活動の分析）に対する回答という形で、結論がまとめられる。さらに、店でのろう理容師と客とのコミュニケーションのあり方を、Giles が提唱する「コミュニケーション・アコモデーション理論」の枠組みに基づいて整理し、そこに多文化共生社会におけるコミュニケーションの指針を見出そうとする。

3. 本論文の成果と課題

第一の成果は、本論文がオーラルヒストリーの手法を用いて、日本のろう理容師たちのコミュニティの歴史やそのメンバーの社会での活動について、具体的に記述したことである。とりわけ、ひとりひとりの理容師と長期にわたって親交を結び、人間的な信頼にもとづいたインタビューを進めたことで、なかなか知りえないろう理容師の体験や思いを聞き取ることができた。同時に、調査者自身のポジショニングについて、冷静な判断がなされていることで調査の客観性が担保されている。こうした点から、本論文はろう者コミュニティを対象とした研究として、きわめて優れたものであると評価できる。

具体的な面では、調査法に関して、膨大な手話でのインタビューを書記日本語に正確に翻訳して記録するという大変な作業をなしとげたことは、高く評価されるべきである。それによって、今後のこうした研究に際して考慮すべきことやさまざまな問題提起など、ろう者コミュニティの調査方法について、さらに深められるべき課題を提示することができた。また、店でろう理容師と客とのコミュニケーションがどのように行われているかを詳細に観察することによって、ろう者と聴者との「歩み寄り」ともいえるべき現象が起こっていることを明らかにしたことも、成果のひとつである。

第二の成果は、多数の関係者とのインタビューや資料の発掘により、全国ろう理容師連盟の活動を具体的に跡づけたことである。著者の分析によれば、全国ろう理容師連盟は、ろう者と手話に関してさまざまな理論的モデルが作られる前から、理論を先取りするような形で活動を進めていた。つまり、全国ろう理容師連盟は、職業団体でありつつ、ろう者の社会運動として先駆的な役割を果たしたことになる。この指摘は、ろうコミュニティ研究に新たな一ページを書き加えるものである。

しかし、その一方、いくつかの問題点も存在する。

第一に、ろう者に関する「医学モデル」「社会モデル」「文化言語モデル」「集団モデル」「集団社会モデル」などの理論的枠組みについては、さらに検討すべき面が残されている。この点は、たんに理論的枠組みだけでなく、現実認識の面にも影響する。手話通訳による情報保障の問題は、文化言語モデルよりは、社会モデルないし集団社会モデルによく適合

するが、本論文ではその点の区別が曖昧な点がある。この点は、全ろ理連の性格付けにあたって考慮されるべきであり、文化言語モデルでいわれる「デフフード」が、全ろ理連の活動のどこに具体化されているかは、さらに検討すべきである。本論文では、全ろ理連による手話通訳要求運動の側面が前面に出すぎた結果、それに全体の議論が引きずられている面がないわけではない。

第二に、比較という面からの考察が不足している。著者が実際に見学したろう学校理容科は宮城県立ろう学校一校のみであるが、他の県のろう学校理容科との比較がほしかった。ろう者の組織は全日本ろうあ連盟に近い組織と全日本ろうあ連盟との違いを意識する傾向のある組織に分かれるので、この点についても注意を払うべきである。また、全ろ理連以外のろう者の団体との比較、あるいは、ろう以外の言語的マイノリティの類似のケースなどとの比較という視点があれば、議論のふくらみが増したであろう。

第三に、ろう学校理容科の教師たちは手話通訳が可能なレベルにあったことが指摘されているが、その場合、現在の私たちが手話通訳として想定するような技能レベルとはかなりの落差があったと推測される。この点は、ろう学校の口話至上主義についての評価とも関係するので、きわめて限定的なスキルを前提とした話であることを、もっと丁寧に記述すべきであった。

とはいえ、本論文がろうコミュニティ研究として画期的な内容をもつ研究成果であることには変わりない。今後は、上記の弱点を克服するとともに、インタビューで協力いただいた全国ろう理容師連盟の方々に対して、手話通訳などを通してフィードバックすることが望まれる。研究対象であった当事者に対して研究成果を開示することで、当事者の見方を高いレベルで研究に反映させられるはずである。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終試験結果の要旨

2017年2月8日

学位請求者 吉岡 佳子
論文題目 ろう理容師たちのライフストーリー
論文審査委員 糟谷啓介 イ ヨンスク 森 壮也

2017年1月25日、本学学位規則第8条第1項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者・吉岡佳子氏の博士学位請求論文「ろう理容師たちのライフストーリー」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、吉岡氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を吉岡氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。